

新刊紹介

神戸高等商業學校講師
商學士 坂西由藏著

經濟生活の歴史的考察

田 崎 仁 義

本書は坂西由藏氏が其の熱愛せらるゝ神戸高等商業學校の教授職を退かるゝに當り、廿一年間在職の紀念として刊行せられた書物である。

坂西學兄は一橋疊の生みたる最も純粹なる學者の典型である。其の修むる所は純一、其の説く所は敬篤、其の操持は謹厚、實に當世に得易からざる君子の儒である。吾々が一橋疊の本科に在學して居つた當時、専攻部で福田先生のゼミナールに於て左右田喜一郎氏と共に同門の雙壁として既に學徒敬仰の的であつた。明治三十七年八月神戸高等商業學校の

教職に就かれてより茲に二十一年、實に其の半世の心血を同校の爲めに盡されたのであつて、同校が今日の盛運を來し、近く我國第二の單科商業大學たらんとするに至れる所以も同氏に負ふ所蓋し鮮少ではないのである。同氏は年齒尙ほ不惑を超へらるゝこと幾干もなく、其の學問の益々醇熟し、人格の彌々玉成せられて學者としても教育家としても寧ろ今後に於て尙ほ其の大成完壁を期せらる可きものがあるのであるが、四五年前から眼疾に罹られ視力漸次減退し、二年前よりは獨りで歩行せらるゝことも出來なくなり、令嬢に手を

曳かれて登校せられ、又た商學士谷田義一氏が助手として傍側に待して氏の口演せらるゝ所を記述せられたり、或は新刊書を讀みて氏にお聽かせしたりせられる等言ふ可からざる困難不便を排して研學講究を續けられ、同校の教壇に立ちて稿本を手になれずして經濟原論及び經濟史の講義を實施し、併せてゼミナールと圖書館主任の任務等を盡して來られたのであつて、其の忠實精勵純真高節と之に絡る逸事美談は人をして感嘆仰慕せしめつゝあつたのであるが、愈今年三月同校教授の職を辭せられなければならぬことになつたのである。實に御同情に堪へざる次第である。然し尙ほ同校講師として經濟史の講義と經濟學研究指導とは續行せらるゝと云ふことであり又た此の春學期には東京商科大學が同氏を聘して經濟學上の主要問題に就て特別講義を請ひ、其の深奥なる造詣は數百の聽講學徒を感嘆せしめたと云ふことであるから聊か以て慰めとせらるゝ所があると思ふ。

本書は即ち同氏が教授職を退かるゝに當りて長き在職の學的紀念に充てられたもので、其の自序にもある如く「明治四十三年六月以來本日（大正十四年三月廿一日）に至るまで、神戸高等商業學校を背景として發表しました拙稿中重なるもの廿一篇を採り、之に若干の修正を加へ」られたるものであり、「此の中六篇は最近四年間に發表」せられたものであるが、大別して四つの部分から成つて居る。即ち第一は『經濟生活發達の過程と經濟自由の精神』で（一）「經濟的文化發達の道程に於ける二傾向」（二）「社會運動と社會進化」、（三）「原始の家族制度」、（四）「救貧制度の變遷」、（五）「有償主義と慈善主義」の五篇を包含して居り、之には附論として「經濟社會の發達と獨立の精神」、「自由と自營と自制」及び「アダム・スミスの時代」の三小篇が添へられて居り、第二には『古代羅馬及び中世獨逸の土地大所有制度』に關するもので「ラティフンディウム」「グランドヘルシャフト」「コロヌス」「コンメ

ンダチオ」「及びゲホエーフエルシャフト」の五項目があり、第三は、『近世工業國の問題』で、(一)「農業國より工業國へ」、(二)「戦前の世界經濟上に於ける英獨米三國の地位」(三)「世界戦争によりて獨逸の被れる人口上の損失」、(四)「社會政策上の根本問題」、(五)「短き勞働時間と大なる勞働效能」の五篇があり、第四は『價格生活概論』であつて、『價格生活理論』、『貨幣價值と限界利用説』、及び「奢侈及び其禁止法」の三篇より成つて居るのである。以下内容に就て其の概要を紹介し、且つ吾人讀餘の所感を附記して見たいと思ふ。

第一部の第一篇「經濟的文化發達の道程に於ける二傾向」と題する論文に於ては先づ「人類の文化が如何なる方向に向つて進み來つたか、其の發達の道程上に如何なる傾向が現はれたかと云ふことが問題であつて、吾々が努力に依つて到達す可き境地は何であるかと云ふことは問題でなく」「人類文化發達の極致は何であるかと云ふことは學問的認識の外にあ

るものと信する」とて氏の學問的立場を宣明し、進んで、人類の社會も吾人の思想も過去より將來に互り絶へざる連鎖を成して進化しつゝあるものである。昨日は今日を生み、今日は又明日を生む。新たな社會は現在の社會より生るゝもので決して突如として湧き出づるものでもなく、理想に依つて作らるゝものでもない。資本主義的經濟組織には種々なる缺陷がある。しかし、缺陷があるからと云ふて今日限り之を止めにして明日から新らしく組織を立て直すこと云ふ様なことは出来るものでない。社會の進化は極めて徐々として行はるゝが、其の徐々たる間に新たなものが舊きものゝ間から生じて来る。即ち將來の産業組織は、現在の産業組織が其の中から生み出すものでなければならぬ。斯くして起る進化の状態の中に於て經濟的文化の發達を來す要件は勞働集約の程度増進である。自然に對して人間性を加ふことが文化であり、經濟生活に於ては勞働が其の地位にあるから經

濟的文化とは自然的條件に勞働力を加ふることである。故に經濟的進化は益々多く人工を自然に加ふることであるとなし、而して之を所期するには其社會を構成する人々が其の個性を磨き、其の持てる全能力を發揮するを要する。而も個體が全能力を發揮し得る爲めに文化發達の道程に二つの傾向が現れた。其の一つは分化の傾向であり、他の一つは平準化の傾向である。化分の傾向の所産は富の不平等、所有の不均である。此の不均が階級の分化を喚び起した。企業者階級と勞働者階級の分化は其である。若しも此の兩階級對立の關係がなかつたならば、現在の如き非常なる經濟的文化の發達を實現することは出来なかつたであらう。然しながら此の分化の傾向が過度に行はれ、上層階級と下層階級との隔絶が餘りに甚しきに至つて前者は後者を手段として使役し、其の個性をも没却する様になれば、社會全體の進歩の爲めに不利益である茲に於て分化したものを平準に導かんとする

作用即ち平準化の傾向が現はれた。是が今日現はれて居るデモクラティクな傾向である資本主義から解放の運動である。斯くの如く此の二傾向は互に相制し動となり反動となつて進化を遂げるのである。されば將來新たに現はれる所の經濟秩序組織は如何なる形をとり得あらうかは豫見することは出来ないが、要するに新たなる分化の傾向と共に成立しなければならぬものであると論じて居られる。此の見解は建部博士一派の社會學者が、社會進化上の(イ)加速度(ロ)自然淘汰(ハ)遺傳(ニ)意識淘汰(ホ)度制(ヘ)理想的淘汰の六理法を二大別して増進的理法及び減退的理法と名けらるゝ所のものと主旨相通するものあり吾人は之を佛者在來の用語を假りて差別の理法及び平等の理法となし、場合によりては彌陀如來の理法及び閻魔大王の理法と稱して居るのであるが、之を經濟的文化發達の道程に於て確認し、現在の資本主義的と社會主義的の兩傾向對抗現象の根本的解明を試みられた

るは實に卓見と云はざるを得ない。特に社會史經濟史等の研究に従事すると稱しながら徒らに一局部の史實の穿鑿考證等にのみ没頭し以て能事了れりとするもの少なからざる間に斯かる達觀的論述を得たるは吾人の快とする所である。

第二の論文「社會運動と社會進化」は前論文の主旨を基礎とするものであつて、今日社會狀態を不満足とし各其の見る所によりて種々なる社會改造の運動が起るが、其等社會運動の中、何れが是にして何れが非なるかを決す可き絶對的標準はない。左傾するもあり、右傾するもあり、前進せんとするもあり、後退せんとするもある。此等總ての社會運動は相互の影響、牽制、摩擦、鍊磨の諸作用を綜合して社會進化の窮極の理想に向て一步づつを進めるものであると論述せられて居る。第三「原始の家族制度」は此方面に於て其後新たな文献も多數に出て居るから今日から見て尙ほ論及す可き點少なからざる感あるが、既

に原始時代に亂婚狀態ありとの謬説を否定し又た母系必しも母權にあらざるを明かに唱導せられて居る等穩健の説と稱す可きである第四「救貧制度の變遷」、第五「有償主義と慈善主義」の二論及び附論たる三章は大體に於て一貫せる論旨の下に構成せられたものであつて、「經濟上の自由を認むるは、獨立自營を要求する所以である。若し此の自由に何等かの制限が加へらるゝに於ては、其の爲めに生活上の困難に遭遇する者は其の爲めに利益を受ける者によりて救濟せらる可きである。吾々は結局能く自ら助くるを得る完全獨立なる個人として發達することを期しなければならぬ」(救貧制度の變遷七三頁)「今日の經濟生活は個人の獨立自營に基く有償主義を以て根本的原则となすものである。従て此の立場を忘れた所の經濟政策は總て有害無益であると思ふ」(有償主義と慈善主義七八頁)「勞働者の人格を尊重し、有償の原則を嚴格に守る所の社會政策に非れば却て有害であると云はなければならぬ」(同八九頁)

「慈善主義と有償主義とは全く相容れざるもの……慈善主義は現在の有償的經濟生活に於ける獅子身中の蟲である」(同^上)「現在の經濟生活は個人主義と自由主義とによりて支配せらるゝものであつて、即ち個人の獨立と人格の自由とを基調として立つものである」。

(附論一)「社會事業の目的は生存競争に後れたる者に食物を恵み衣服を給することではない其の目的は立派な人間を作ること、自助の精神に目覺めたる人間を回復することである」

(同^上)「今日の經濟秩序は個人の自由、人格の尊重を基として立つものである。何人も他人の自由を侵さざる限り自己の自由を制限せらるゝことなく、他人の人格を傷けざる限り自己の人格を無視せらるゝことなきを原則とする」(附論二)「併しながら社會が個人に許す所の自由は決して絶對的なるを得ない。……故に各自社會の一員たる地位に顧み、其の自由意志に基き自己の行動に適當なる抑制を加ふること即ち『自制』が必要である」(同^上)

「一七七六年アダム・スミスは一の時代より他の時代への推移の分水嶺に立つて一の大なるモニユメントを立てた。葬り去らる可き時代は制限、干涉、束縛、の時代であつて來る可き時代は自由、放任、解放の時代であつた即ちアダム・スミスの立てたるモニユメントにはその表面に『經濟自由主義』と銘せられる。之と同時にその他面には『政治的自由主義』と刻せられ、又その礎石には『技術的解放』と記せられる」(附論三)「アダム・スミスの『諸國民の富』は經濟自由主義の原則を學理的に樹立した」(同^上)等は其等數篇の間に結節をなす精髓的の文句であつて、徹頭徹尾經濟自由の精神を讚美提唱したものであり、無償主義、慈善主義に對して痛烈に排撃したものである。吾人は此等の諸篇を讀むに當りて先づ以て坂西學兄が多年の間一貫せる主張を舉揚して倦まざる學問的忠實の態度に對して肅然として襟を正さざるを得ざるものがある而して學兄が經濟的自由の大主義を舉揚する

半面には常に人格の獨立尊嚴の大法輪が相伴ふて轉せられて居るのである。封建の遺習を脱せんとして未だ克く脱し得ざりし明治の日本國民が不充分ながらも今日の程度に經濟的自由と人格の獨立とを發揮することを得たのは、學兄の主張に與かること決して少なからざることを思ふて多大の敬意と感謝とを表示するを禁ぜざるものがあるのであるが、只だ然し上記の論文の主旨全體に對しては必ずしも全然疑問なき能はざるものがある。其の第一には、經濟政策と社會政策との本質的區別は何を標準とせらるゝやの點であり、第二には經濟上に於ては有償主義にあらざれば經濟的自由の精神を發揮するを得ずとするも、社會上に於ては無償主義によりて必ずしも人格の獨立自由を害せざる範圍がありはせないかと云ふ點であり、第三には經濟的自由と經濟的強制とは經濟的發達の道程に於ける分化及び平準化の二傾向の相對的現はれではあるまいか、果して然りとするならば、此の兩者は

其の何れをも絶對的に推賞し排撃す可きものではないとの結論に到達するのではなからうか。吾人は有償主義は差別觀の現れであり、無償主義は平等觀の現れであると見たいのであり、人格の嚴尊は兩者交錯の間にありて必ずしも維持の出来ないことはないと思ふものである。從來の意味に於ける、又た從來の形式に於ける慈善主義は賛し難きも、全然有償主義を超越して提供したる所の喜捨、又は寄附の如きは其の目的と方法の如何によりて個人に對しても社會に對しても有害ではないのみならず、甚だ有益なるものであることを認むるものである。富豪が大金を喜捨して學術研究所を設立したり、私有の庭園を無償に提供して公園となしたり、又は特志家が學者や藝術家に資金を無償的に提供して其の目的の達成を助けたりすることは、寧ろ大に獎勵す可き事であり、有償主義的經濟の間にありて而も有償主義を超越せる無償主義の存在することは必ずしも不可ではないかと思はれる

米國の人種學者且つ社會學者であつて永くスミスリニアン學術研究所の亞米利加人種學局のデレクターたりしボーウエル氏が、經濟進化したに於て property, wealth, capital, investment, 而して endowment と進むと言つたことは極めて暗示に富む一の卓見であると吾人は敬服して居る次第であつて、經濟の極致は有償主義を超越するにあるのではないかとの考に吾人は傾きつゝあるのであるから、坂西學兄の上述の斷定には甚だ疑なきを得ぬのである。

第二の部分たる『古代羅馬及び中世獨逸の土地大所有制度』に關する「ラティフォンディウム」以下五篇は歐洲古代及中世の經濟史特に土地制度上重要にして且興味深き問題に關する解明であり、又た日本及び支那等の土地制度の史的研究者にとりても頗る有益なる比較參照の資料となるものである。

第三の部分たる『近世工業國の問題』下に收められたる五篇も甚だ價值高き有益なる論

文である。其の一たる「農業國より工業國へ」は我國現下の經濟政策の大局に關して我國も英獨二國の如く工業國に進むことを得策とする云ふことを歴史的統計的に論結せられたものである。我國の人口問題の解決も其によりて遂げられると主張せられて居る。特に人口問題の解決を移民政策によりてなさんとする論者を痛撃して、是は生絲を其のまゝ外國に出さうとすると同様に貴重なる勞働力を生地のみで外國に出さうとするものである。日本で生れ日本で育てられ日本で教育を受けた働き盛りの貴重なる勞働力、生産の最も重要な原動力を外國に出すのは甚だ愚策である。工業を發達せしめて此等の勞働力を國內に於て利用することが利益であることを論明せられて居る。要するに限られたる面積の土地の上に今日より多くの人口をよりよく養ひそれによりて國力發展を期するならば、農業國より工業國への推移の勢を助長しなればならぬとの論旨である。「戰前の世界經濟

上に於ける英獨米三國の地位」は約七十頁に互る長大論文で過去百年世界經濟上に於て最も優勢なる地位を占めて居つた英國が、此の二三十年以來獨逸と米國との勃興の爲めに其の地位の動搖を來したことを、人口の増殖、移殖民、鐵石炭の產額、綿工業の發達、外國貿易額、海運等の各方面から其の増減變化の趨勢を比較論究して、然る後日本現今の地位を回顧考量したもので、極めて精緻穩健なる議論である。「世界戰爭によりて獨逸の被れる人口上の損失」は戰前數十年に於ける獨逸人口動態、戰時人口動態に關する出生の減少、死亡の増加、乳兒死亡、結婚等に關する精細なる統計的研究によりて約三百三十五萬の人口的大損失を生じたることを究明し、獨逸民族の衰頹は獨り獨逸民族自身の爲めに悲しむ可きことであるのみならず、また全人類文化の爲めに悲しむ可きことである。獨逸民族の隆興は人類文化發達の爲めに必要である。世界文化の華園は諸民族の花がトリドリに咲き

競へるによつて成立つものである。經濟上より見るも世界の他の諸國は獨逸の回復を妨ぐることにによりて發達し得るものでは決してない旨を附論してある。失明の身を以て斯かる精細煩雜なる研究を成し遂げられたることは確かに學界の驚畏である。吾人は學兄の學問的熱誠の如何に熾烈であるかを想望して感激の餘涙なきを得ざるものである。「社會政策上の根本問題」は普通の見解によれば社會政策の目的は有產者と無產者との階級的軋轢を防ぎ其の調和を期するにありと云ふにあれども坂西學兄は其の外に更に根本的な積極的目的があつて、それは結局人の問題である。勞働者を憐む可きものとして之に慈善的保護を加へんとするにあらずして、彼等の人格の獨立自由を維持せしむるにありとの主張を高唱したものであるが、其の中心思想は第一部に論述せられたる經濟的自由の精神に基いたものであることが明かに窺はれる。社會政策其の者の本質論に關して學兄と多少其の立場を

異にして居る吾人は「眞の社會政策は純然たる生産政策と一致す可きものである」(二七頁)と云ふ様な點に就て遺憾ながら賛同し得ざることを表明せざるを得ない。「短き労働時間と大なる労働效能」此の論は學兄が明治四十四年に神戸に於て講演せられたるものである。

此の問題が學説として廣く我國に承認せらるゝに至つたのはブレンタノ、福田兩先生合著の『労働經濟論』を始め坂西學兄の提唱等が與つて大に力あるものと云はざるを得ぬ。本論は此意味に於て甚だ價值ある紀念的のものであるのみならず、其の條理整然且つ深切なる説述は今日に於ても此方面の學徒にとつて一つの玉條たるを失はないものである。

『價值生活概論』の名の下に收められたる「價格生活の理論」、「貨幣價值と限界利用説」及び「奢侈と奢侈禁止法」の三篇(特に前者)は經濟生活の歴史的考察と題する本書の内容の一部たるに不適當のものでは勿論ないけれども、どちらかと云へば經濟史的のもの

であるよりはより多く、經濟理論的のものであつて、其々有益なる論文ではあるが、吾輩よりも他により適當なる紹介者があることゝ信するが故に之に論及することを慎むことにする。

以上私は吾が尊敬する坂西學兄の此の紀念す可き良書を廣く天下の學人に推薦せんと欲して、學と學者とに對する敬虔と忠實とを以て其の紹介を試みたのであるが、性來粗拙にして未だ其の眞價を顯彰し盡さざる點多々あるであらうことを虞るゝものである。特に一二の愚見を添へたるなど甚だ罪深く感ずるを禁じ得ない。擲筆するに當り深く之を謝する所である。